The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	小浜・正法寺半跏思惟像について
Author(s)	藤岡, 穣
Citation	待兼山論叢. 芸術篇. 2023, 57, p. 1-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94917
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

小浜・正法寺半跏思惟像について

藤岡　穣

キーワード：正法寺／半跏思惟像／金銅仏／蛍光X線分析

福井県小浜市大原に所在する正法寺（真言宗泉涌寺派）の本尊金銅半跏思惟像（以下、本像）（図1～7）は、[1]総高五八・七cm、坐高三五・四cmを計る、やや大型の金銅仏である。[2]重量も三六・四kgにおよぶ。[3]

本像の存在をいち早く紹介されたのは、小浜市羽賀出身の考古学者、上田三平氏であった。[4]その後、昭和四十三年（一九六八）初版の『わかさ小浜の文化財』において、鎌倉時代の模古作として紹介されたが、本尊の存在が広く注目されたのは昭和五十一年に奈良国立博物館で開催された「平安鎌倉の金銅仏」展であったとみられる。[5]そして、昭和五十二年には鎌倉時代の作として福井県の指定文化財となり、昭和五十八年には『若狭の古寺美術』にも収録されている。しかし、その後本格的な調査が行われることはなく、鎌倉時代の作との位置づけが踏襲されてきた。拙稿は、平成三十年、令和五年の二度にわたって本像の調査の機会を得たことを踏まえ、本像の位置づけを再検討するものである。

図1　正法寺半跏思惟像

図3　同　右側面

図2　同　左側面

図5　同　像底

図4　同　背面

一　形状

本像は、左足を踏み下げ、右手を右頬に添える、いわゆる半跏思惟形をしめす。頭部はわずかに右を向き、また右に傾げ、背を丸めて右肩をわずかに前方に出し、右肘を右大腿部について右手を胸前に挙げる。右手は掌をやや内に向け、第二・三指を伸ばして右頬下方に接し、第四・五指は柔らかく曲げる。左脚は踏み下げ、右足首を左大腿部に乗せ、左手は降ろして全指で右踵から足首を緩くつかむ。

頭頂に半球形の髻を結い、豪華な宝冠をいただく。宝冠の冠帯は上下を連珠文で縁取り、正面には蓮台付きの火炎

図6　同　頭部

図7　同　頭部左側面

宝珠を表し、両側の飾りは宝珠形の鐶とし、冠繒を通して結び目を作り、後方に結び輪を垂らす。冠繒の先端は両肩に垂れ、左方分は肘外まで、右方分は大腿部付け根にいたる。三面の頭飾の周囲にはいずれも蕨手形の光焔をめぐらし、三面の頭飾の間には宝珠とそれを包む唐草を透彫り風に表している。正面から側面にかけての地髪部は平たい髪束を重ね、鬢髪は耳前に波打ちながら垂れる。垂髪は耳後ろから両肩に垂れ、両肩上で五条に分かれ、それぞれ波打って両肩上に広がる。両目は瞼を刻まず、鼻孔も穿たないが、小鼻と人中は明確に刻みつける。耳は対耳輪の上部の上下脚をY字形に開き、長く垂れた耳朶は貫通している。現状、白毫相は表されず、三道も刻まない。

上半身は裸形で、裙をはき、腰帯をしめ、両肩に天衣をかける。裙は榻座の前面、左脚を覆い、背面では榻座に敷き込まれ、右脚から榻座右方半ばにかかる。正面中央、両側に折りたたみを作り、その下縁を品字形に表し、右足にかかる末端部がめくれ返り、その下方の衣縁に階段状の折りたたみを作り、腰帯上にはみだす上縁を波打たせる。腰帯は正面で蝶結びし、末端は右足首の下層にいたる。天衣は背面上部を覆い、両肩から左肘内、右上膊内側を通って榻座両側に垂下し、反花上で翻転し、尾鰭状に広がる末端は丸框上に達する。浅いU字形を呈する胸飾は連珠二条・列弁とし、中央と左右肩下がりに八弁花を表す。腕釧は列弁・連珠・列弁とする。左右の腰脇から佩飾が垂下する。佩飾は腰帯にかけ、円形の鐶を通して交叉させ、垂下部には蝶結びを作り、末端は房飾りとして反花上にいたる。なお、宝冠の冠帯、胸飾、腕釧、佩飾の鐶の連珠文にはいずれも魚々子鏨を用いている。

榻座には布をかけ、クッション部の下方を丸い紐で括り、下方には複弁・十方・間弁付きの反花と丸框を具える。その丸框左前方から茎が伸び、踏み下ろした左足を受ける小さな単弁・三段葺きの蓮華座を表す。その蓮茎のまわりには、巻葉状の唐草（水草）が絡みついている。

二　制作技法 ―蛍光X線分析の結果を踏まえて―

本像は、ほぼ全容を青銅による一鋳とする。柔らかな造形や各部の複雑な形状から、蠟型による鋳造とみて間違いないだろう。ただし、冠帯より上部は鋳造時に欠陥が生じたために、鋳かけを行い、さらに背面にI字形の鋳かすがいを施している（図8）。なお、後頭部の右方（I字形の鋳かすがいから右頭飾の裏側まで）、髻の頂から後方右寄りには、再度の鋳かけが施されているらしい。鋳かけそれぞれの下縁には鏨で削った痕が残る。正面頭飾の中程から額にかけて、その左右の冠帯および宝冠の一部は、蛍光X線分析により、いずれも銅（Cu）が九九％以上のほぼ純銅であることが判明した（図9）[6]。いずれも宝冠の精緻な文様を表したパーツであり、その様態から鋳造によるものと思

図8　同　後頭部

図9　同　宝冠、左頬の嵌金

われるが、それをもって嵌金状に表面を覆っているとみられる。[7] 左頭飾の中央部には、同様に表面を覆っていた嵌金状のパーツが脱落しているとみられる表面が荒れた部分があり、ここに上下の継ぎ目が認められる点からも、これら嵌金状のパーツの下には鋳かけの接合部が隠れているものとみられる。

像内を観察すると、およそ像の概形にしたがって中型を造形したことが知られる。中型には、たとえば反花座の各弁や衣褶までは表されていないが、銅厚は全体に薄く、触感ながら〇・五cm前後とみられる。像内には全面にわたり、中型をかき出した際についたとみられる鏨の傷跡が残っている。ただし、地付から高さ約三四cm、およそ胸飾のあたりから上に黄土色の中型土が残存し、その中心には数ミリ角の鉄心が認められる。クッション部右方（佩飾と天衣との間）の下縁に方形の凹みがある（図10）。内部から観察すると、ここは銅片を埋めて塞ぎ、内部において周囲から鏨を打ち、かしめ留めているようである（図11の①）。[8] また、像内においては、これと左右対称の位置、すなわちクッション部左方（佩飾と天衣との間）の下縁にも銅片が埋められ（同②）、さらに同じ高さでたどると後方に二カ所（同③④）、そして左膝内側（同⑤）にも銅片ないし凹みが認められる。像底をハバキとし、胸部から頭頂にかけて鉄心を用いた他、適宜に笄によって内外の鋳型を固定していた痕跡と考えられる。特に③や⑤の凹みの外縁部には鋳バリ状の突起があり、蠟型の段階で外側から笄を打った痕跡のように見受けられる。いずれも像表

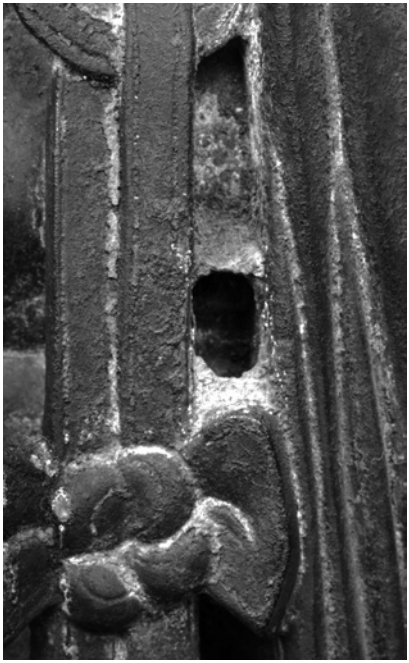


図10　同　榻座右側面の小孔

面にはその痕跡は認めがたいが、嵌金ないし鋳かけによって孔を塞いでいるものと思われる。なお、脚部上面（右膝内側）に小孔があるが、内部から見ると前後の長さ約二㎝、幅数ミリの縦長の孔があり、表面から薄く鋳かけてそれを塞ぎ、その一部が破れて小孔となっているものとみられる（同⑥）。また、左足首上部と左膝内側に右膝内側の凹みと同等の大きさの横長の凹みがあり、中型土が残っている（同⑦）。あるいは、これらも笄の痕跡かも知れない。

左脚下方の榻座から反花にかけて、すなわち左足を受ける小蓮華座の内側にあたる部分に鋳かけが施されることも注目される。小蓮華座は内部が空洞で、かつ本体と共鋳とみられることから、本体と小蓮華座とは中型が連続しており、中型を取り除いた後に榻座の開口部を塞いだとみられる。なお、鋳かけは榻座内、反花部とそれらにかぶさる中央部の三箇所に分かれ、中央部の中心に笄とみられる銅心がある。

この他、目視により、左頬に二箇所、胸飾の上下三箇所に嵌金を施していることがわかる（銅色を呈し、一部がわずかに浮き上がる）（図9・12）。このうち、蛍光X線分析が可能であった胸飾左下方の嵌金についてはほぼ純銅であることが判明した[9]。また、台座丸框の後方に光背の支柱を立てるためとみられる方形の孔が上下に貫通し、その孔の内側に銅板をめぐらせている。

図11　同　像内の笄の痕跡と嵌金、鋳かけ

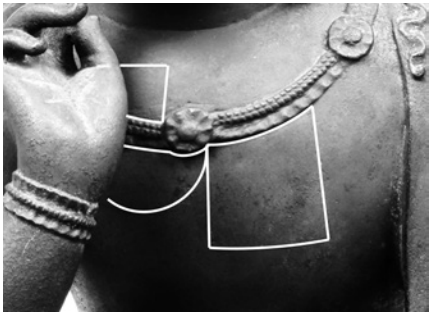


図12　同　胸部の嵌金

なお、本体の青銅の組成は、[10]平均値で銅（Cu）九五・五％、錫（Sn）二・四％、鉛（Pb）〇・二％、砒素（As）一・二％、鉄（Fe）〇・二％、ビスマス（Bi）〇・四％等と、銅－錫－砒素合金であることが判明した。また、嵌金部分については、銅九九・八％ときわめて純度の高い銅を使用していることが特筆される。

三　保存状態

保存状態は、一見すると良好のようであるが、火中によって少なからずダメージを受けている。宝冠正面飾りの頂部、右方の冠帯の紐の結び目の一部が欠損し、丸框と反花の右前方部が割損し、亀裂が走っている。鍍金がほとんどの箇所で認められないのも火中が原因と考えられよう。[11]なお、鍍金が認められた箇所においても水銀は検出されなかった。もとよりアマルガム鍍金でなかった可能性はあるものの、[12]火中のために気化した可能性が高いと思われる。宝冠正面から額にかけての嵌金状の部分と鋳造による本体との間に亀裂が生じていたり、胸飾左下方の方形の嵌金のように本体からわずかに浮き上がっていたりするのも火中が原因であろう。子細に見ると、青銅による鋳造部分と純銅による嵌金部分では、前者の融点が低いために、表面がやや荒れて形が甘くなっていることにも気づかれる。魚々子鏨による文様をはじめ、本来はもっとシャープな造形であったに違いない。

四　様式・形式の検討と制作年代

本像は日本古代の半跏思惟像のなかでも肉付き豊かで、頬が張り、胸が盛り上がり、膝の丸みが強調され、手先、

足先まではち切れんばかりの肉付きをみせる。その充実した肉付きは法隆寺献納宝物一六三号、一六四号の半跏思惟像[13]に匹敵するが、本像はプロポーションが整い、肉取りにも抑揚がある点に一層の様式の進展が認められる。衣褶表現は、襞に丸みをもたせ、衣文の流れも自然で、衣縁の揺れや反りによって薄く柔らかな布帛の表現に成功している一方、折りたたんだ衣の衣縁が品字形やS字形を作り出し、天衣末端を尾鰭状とするなど意匠性も認められ、写実性と装飾性を兼ねそなえている。また、柔らかな肉付きで下膨れぎみに頬の張った顔立ちは、瞼を刻まず、おそらくは墨線と彩色のみで目を表したとみられる点も含め、奈良・岡寺伝来の半跏思惟像（図13）に通じるところがあり、それをさらに成熟させた感がある。

細部に目を転じると、まず耳の形は、巻き込みの強い耳輪、上下脚を前方に向かってY字形に開く対耳輪、長く垂れる耳朶とその縦長の貫通孔のいずれもが薬師寺金堂薬師三尊像や同東院堂聖観音像に最も近い。[14]ただし、本像の耳輪に丸みがない点は薬師寺像とは異なり、その角張った表現は興福寺仏頭や同東金堂聖観音像に類似する。

宝冠は白鳳時代に流行した三面頭飾の形式を継承しながら、頭飾の間に透彫り風の飾りを加えている。こうした形式は東アジアを見渡しても類例が少なく、日本の金銅仏では法一七二号観音菩薩像にやや近い例がある程度である。そうしたなか、隋代の檀像と

図13　岡寺　如意輪観音菩薩像頭部

図14　堺市博物館　菩薩像頭部

して知られる堺市博物館の木造観音菩薩像の存在が注目される（図14）。堺市博物館像の宝冠には、本像と同じく三面頭飾の間に透彫り風の唐草が表されている。その表現は本像よりも自在であり、上部が欠失するため宝珠様の飾りの有無も不明ながら、各頭飾の周囲に蕨手状の光焔がめぐり、左右の頭飾の中央に冠繒の結び目を表し、鬢髪が耳前に波打って垂れる点など、本像と多くの共通点が認められることは看過できない。本像の左右頭飾は、蕨手状の光焔が上部では形を崩し、光焔の穂先の揺らめきを意図的に表現しているが、こうした表現は隋～初唐の作例に散見する。これらを要するに、本像の宝冠は隋～初唐の彫塑像から影響を受けて成立したものと考えられる。ただし、先端を蕨手状に巻く唐草の様態自体はむしろ東院堂聖観音像の髻飾りに近く、上下縁に連珠文を施す冠帯は法隆寺伝橘夫人念持仏の脇侍像や、少し幅が狭いものの同夢違観音像にみることができる。また、左右頭飾を鐶状とし、そこに冠繒を通して結び目を表すのは兵庫・鶴林寺観音菩薩像、法一八五号観音・勢至菩薩像を類例としてあげることができ、蕨手状の光焔が頭飾のほぼ全体を取り巻くのは壬辰年（六九二）銘の島根・鰐淵寺菩薩立像に共通することを付言しておきたい。

胸飾は、飛鳥時代後期の作例によくみられる連珠文二条・列弁とし、三つの八弁花を配する点には若干の進取性が認められるが、奈良時代に展開する華やかな胸飾とは一線を画している。[15] 佩飾の形式は、法一六三号、法一六四号、

正木美術館の各半跏思惟像と軌を一にし、日本古代の半跏思惟像のなかでは意匠化が進んだものと言えよう。

その他、肩上に垂れ、先端が分岐して波打つ垂髪は、百済観音をはじめ飛鳥時代後期に流行した垂髪の一形式ながら、本像のそれは髪束がひときわ立体的で、波打ちも細かい点に特色があり、肉取りや衣褶とともに写実的表現を目指したものと捉えられる。左足下の蓮華の茎に巻葉状の水草が絡みつくのも特徴的である。蓮茎のまわりに唐草が絡みつく作例としては伝橘夫人念持仏がよく知られるが、[16] 本像のそれは茎を覆い隠すほどにボリューム豊かで、こうした表現の源流のひとつとも言える四川綿陽壁水寺摩崖造像第一九龕の阿弥陀如来像の蓮華座（図15）に近似する表現をみせている。

図15　四川綿陽・壁水寺摩崖造像第19龕蓮茎

以上、本像は肉付きや衣褶、細部形式についても隋ないし初唐様式の影響が色濃く、日本の作例との比較では飛鳥時代末期から奈良時代にかけての作例に共通する点が多いことが明らかとなった。本像は、従来、鎌倉時代の擬古的作例とみなされてきたが、そこに特段の鎌倉時代らしさを認めることは困難と思われる。

形の問題のみならず、先にしめした本像の青銅の組成が、むしろ日本の古代金銅仏にふさわしい値であることも重要である。鎌倉時代の制作であれば鉛の比率がもっと多く、技法の面でもさらに銅厚が薄いのが通例であろう。加えて、魚々子鏨の使用、純銅で鋳造したパーツを嵌金のように用いることをはじめ、鋳かけや嵌金をほどこした高度な技術は、本像の制作が古代にさ

かのぼることを物語っている。

本像の制作時期については、白鳳時代の作例の諸要素を継承しながら様式の進展が認められる点、初唐様式を受容した諸作例、とりわけ平城遷都後の造像とみられる薬師寺金堂像や同東院堂聖観音像との類似に注目すれば飛鳥時代後期にさかのぼるとは思われない。しかし、薬師寺像に比べると守旧的であることは明らかで、したがって薬師寺像より大きく降ることはなく、奈良時代初期、八世紀第一四半期の制作とみるのが妥当だと考える。また、制作地は、大きさ、作域、金属組成等から平城であったとみて間違いないと思われる。

五　伝承、伝来をめぐる覚え書き

本像は、正法寺の鍵取役を代々勤めてきた大橋家所蔵の縁起によれば、[17]元暦元年（一一八四）に大橋五郎左衛門が二子嶋（双児島）の近くで漁をしていたところ、網にかかった如意輪観音が光り輝き、それを海中より脇に抱えて引き上げ、坂尻村の山上に堂を建立して安置したのが始まりという。その後、如意輪観音は人々の信仰を集めたが、交通の便がよい小浜に安置すべきとの夢告によって後瀬山に移し、堂宇を建立して正法寺と称したという。このうち坂尻村とは現在の仏谷のことで、小浜湾を囲む内外海半島の南岸に位置し、後瀬山とは正法寺の東南にある山で、戦国時代には若狭守護武田元光が城を築いたことで知られる。すなわち、この縁起によれば、本像はもと仏谷の山上に安置され、間もなく現在の正法寺に近い後瀬山に移されたとされる。なお、元禄六年（一六九三）頃、すなわち大橋家の縁起と相前後しての成立とされる『若狭郡県志』[18]巻第五（寺院部）「上山観音堂附正法寺」の項にも、この縁起の原型とも言うべき如意輪観音の伝承に加え、宝徳元年（一四四九）に妙徳寺（小浜市青井）の住持玄室が正法寺を建立し、

この像を庇護したことが記されている。

一方、正法寺には、根拠は不明ながら次のような伝承があるという。[19] 元徳元年（一三二九）、佐渡で巡検使として勤めていた父を島民に殺された本馬三郎が、父の仇を討たんと祈ったところ老翁が現れ、三郎とともに島を平定した。ともに若狭に還ると、老翁は坂尻浦において入水、やがて海中から金色の光がさし、浦の長であった大橋五郎左衛門が海中から光るものを引き上げると如意輪観音であった。そして、宝徳元年（一四四九）に遷座の夢告があり、小浜大原の上ノ山に観音堂を建立して移したという。[20]

ただし、宝暦七年（一七五七）成立の『拾椎雑話』によれば、小浜藩主京極高次の妻常高院（浅井長政女）が寛永七年（一六三〇）に常高寺を開くにあたって道を付け替えることがあり、付近に空地が生じたために仏谷の上ノ山にあった観音像を移して正法寺と号したとの伝承があったという。[21] 常高寺は小浜浅間、すなわち正法寺のすぐ南西に位置し、これを信じれば、観音像を移したのは江戸時代に入ってからということになり、先の縁起とは齟齬をきたしてしまう。

さて、以上の伝承において、本像がもとは小浜市大原ではなく、内外海半島の仏谷に安置されていたという点が共通するのは興味深いが、いずれにしてもそれ以前の伝来については不明とせざるを得ない。そもそも本像は当地での制作ではなく、平城において制作された可能性がきわめて高く、制作当初か、あるいは後に当地にもたらされたと考えなければならない。

小浜は若狭国の中心として古くから栄え、仏教も早くから根付いていた。小浜市街地から東に五kmに位置する太興寺廃寺は、出土瓦等から七世紀末頃の創建とみられており、東大寺修二会のお水送りで知られる若狭神宮寺についても、元正天皇の勅願により和銅七年（七一四）に若狭国一の宮（若狭彦神社）の神宮寺として創建されたとするのは伝承に過ぎないとしても、出土瓦から八世紀中頃の創建とみられている。[22]

『東大寺要録』巻第六「封戸水田章第八」には、天平勝宝四年（七五二）十月廿五日付の東大寺造寺司から三綱所に宛てた、東大寺封戸のうち一千戸分を寺家雑用料とする旨を報告した牒がみえるが、その中に「若狭国伍十戸　遠敷郡玉置郷」とあり、これ以前に当地に東大寺領が存在したことが知られ、[23] 東大寺修二会との関連も想定し得る。さらに、天平十九年（七四七）の『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』にみえる墾田地のなかに「若狭国乎入郡嶋山佰町　四至四面海」とあることも注目される。嶋山とは四方を海に囲まれた島とみられ、現在では砂洲により陸とつながっている大島半島（おおい町）とみる説が有力視されているが、文永二年（一二六五）「若狭国惣田数帳案」にみえる志万郷のあった内外海半島から阿納あたりにかけての地域に比定する説もあり、[24] 後者だとすれば本像がもと伝来した仏谷とも重なる。

このように小浜は奈良時代から東大寺や大安寺と深くつながり、本像のようなすぐれた仏像がもたらされ、信仰を集める素地は十分にあったと考えられる。拙稿では本像の制作年代が奈良時代初期にさかのぼること、制作地が平城であることを指摘したが、残念ながら本像の伝来を明確にすることはできなかった。しかし、本像が小浜と奈良との結びつきを証す存在である可能性は残されている。今後の各方面からの研究に委ねたい。

［注］

（1）本像は如意輪観音菩薩として伝来したが、本来は弥勒菩薩であったと思われることから、拙稿ではその形姿から半跏思惟像と称することとする。

（2）法量の詳細は以下のとおり（単位はcm）。

総高	五八・七	像高（頂－左足）	四八・四	像高（坐高）	三五・四
髪際高	二七・六	頭頂－顎	一四・六	面長	六・八
耳張り	九・九	面幅	六・九	面奥	九・四
胸奥（左）	八・五	胸奥（右）	八・八	腹奥	八・〇
反花座高	五・三	框座高	〇・九	框座幅	三三・〇
框座奥	三二・二				

（3）『わかさ小浜の文化財（図録）』（小浜市教育委員会、一九八五年）。

（4）上田三平『越前及若狭地方の史跡』（三秀舎、一九三三年）。上田氏は本書において、正法寺の管理を担う大橋家に伝わる本像の縁起により、元暦元年（一一八四）に漁師の大橋五郎左衛門が海中より救い上げて坂尻村（小浜市仏谷）に安置し、その後夢告により後瀬山（現在地はその北麓）に移したとの由緒を記している。

（5）奈良国立博物館『平安鎌倉の金銅仏』（一九七六年）。

（6）蛍光X線分析の分析ポイント、定量値、平均値等の詳細については巻末の図表を参照されたい。

（7）ただし、額中央部は、蛍光X線分析の結果によれば本体と同様の青銅の値であった。あるいは正面中央の嵌金状のパーツは冠帯の下縁で上下に分かれており、上部は純銅、下部は青銅による鋳造なのかも知れない。とは言え、左眉の上部（嵌金状パーツの下縁）は純銅とみられるため、なお検討を要する。

（8）図11はリコー全天球カメラTHETA Z1で撮影した画像をトリミングしたもので、正距方位図法による世界地図のような画像になっている。

（9）右頬（計測ポイント44）についても銅九八％の値であったが、嵌金と地金にまたがっている部分での計測だったかも知れない。

（10）ここでは小数点以下一桁の数字でしめす。

（11）本像のこうした様態について、後述する縁起に基づき、本像が海中で発見されたからとする説もあるが、火中のためとみるのが妥当であろう。

（12）アマルガム鍍金が施されている場合、蛍光X線分析を行うと、通常は金に対して一割程度の水銀が検出される。ただし、古代の金銅仏には、ごく稀にではあるが、鍍金がほどこされながら水銀が検出されず、アマルガム鍍金ではないと思われる作例がある。これまで報告されたものとしては京都・蟹満寺釈迦如来像があり（長柄毅一「蛍光X線分析装置による非破壊分析」、蟹満寺釈迦如来坐像調査委員会『国宝蟹満寺釈迦如来坐像』所収、八木書店、二〇一一年）、筆者の調査によれば法隆寺献納宝物一六六号観音菩薩像、同一八三号観音菩薩像がそうした作例である。ただし、その鍍金方法については未詳である。

（13）以下、法隆寺献納宝物については、「法〇〇〇号」のように略す。

（14）薬師寺金堂薬師如来像、同東院堂聖観音像、興福寺東金堂脇侍像の耳の形については拙稿「古代寺院の仏像」（シリーズ古代史をひらく『古代寺院』岩波書店、二〇一九年）のコラム「飛鳥仏の耳の形」の図を参照されたい。

（15）奈良時代の胸飾の展開については松田誠一郎「菩薩像、神将像の意匠形式の展開」（『日本美術全集第四巻　東大寺と平城京　奈良の建築・彫刻』講談社、一九九〇年）を参照されたい。

（16）金子啓明「生命思想としての白鳳彫刻―法隆寺伝橘夫人念持仏阿弥陀三尊像について―」（『MUSEUM』五六五、二〇〇〇年）。

（17）巻子装、紙本墨書、一巻。奥書等はなく成立時期は不詳ながら、本縁起を記した大橋宗継は同家過去帳によれば元禄十一年（一六九八）卒とあり、その名は同家所蔵の貞享三年（一六八六）「若一王子大権現本地十一面観世音菩薩」宮殿の棟札の写しにもみえることから、十七世紀末頃とみてよいだろう。縁起本文は以下のとおり。

　私先祖大橋五郎左衛門尉と申候ハ田尻村に城を構へ、坂尻村を所領申候。東境ハ櫂岩、西境ハ矢ノ竹、海境ハ明星くり也。禁裡の御奉公相勤候節下シ給ふ所の所領也。元暦元年三月下旬の比、五郎左衛門二子嶋の邊にて網をひかせ候處、いつにかはり網あかりかね、波間より光明耀候故、五郎左衛門海中へ飛入見候へは如意輪観世音の尊像也。其

儘脇挿上り坂尻村の山上に一宇の堂を建立し奉り。五郎左衛門本尊と奉仰、信心渇仰す。依之坂尻村の男女ハ不及申、遠近の者昼夜参詣群聚をなす。或時薩埵の尊体より光明遍満す。五郎左衛門奇異の思をなし通夜する所に薩埵夢中につけてのたまはく此山上ハ諸人参詣の便あし。小濱の後瀬山の麓に移、末世まて参詣の便よき所に安置すへし。信心の輩現世後世ともに守るへし、とあらたに御つけあり。五郎左衛門いよ〻〻信心肝に銘し、御つけにまかせ、後瀬山乃麓に御堂を建立し、則上の山の観世音と奉仰。此事禁裡え申上る處に五郎左衛門を大橋脇左衛門と改被、坂尻村をも佛谷村と可改との宣旨也。それより田尻村を立退、坂尻村に住居仕候。後瀬山の麓へひき申し候。而より寺を正法寺と名つけ、今に上の山正法寺観世音と申候。脇左衛門家の由緒正敷本尊故、今の私弐まて開帳閉帳共ニ私家より仕来候。かきも封もつ事正法寺に預ケ置申候。五郎左衛門氏神は若一王寺にて則宮も田尻より坂尻村へ移置申候。已上。

大橋脇左衛門／末孫／宗継。

(18)『若狭郡県志』の成立年代は、杉原丈夫・松原信之編『越前若狭地誌叢書』中巻(松見文庫、一九七三年)の考証によった。

(19)岡部伊都子『野の寺　山の寺』(新潮社、一九八一年)が引用する正法寺の栞に記された縁起による。なお、同書は、正法寺隆妙尼の口伝として、仇討ちは佐渡に配流となった日野資朝の子、阿新丸が父の仇敵である佐渡守護本間入道泰宣の子、本間三郎を討ったのが実際で、本像は阿新丸の念持仏であったとの趣意も記している。隆妙尼の口伝は、『太平記』巻一二「阿新殿事」等にみえる敵討の逸話に基づくものとみられる。

(20)前掲注(2)『わかさ小浜の文化財(図録』の解説には「この正法寺の観音は、平安末期の縁起物語に登場する。元暦元年(一一八四)、佐渡島巡検使船に忽然と現われてその使命を果させた老翁が、帰還着岸の間ぎわ、小浜港坂尻浦にて我を信ずること篤く久しかったことを謝して入水した。ところがその後、夜々海中に金色の光がさすので、その浦の長、大橋五郎左衛門なるものが海中に入り、光り耀く仏像を脇に挾んで拾い上げ、堂を上山に建てて奉安した。そして浦の名を仏谷と改め、長の名を脇左衛門と称したと伝える。」とある。大橋家所蔵の縁起と寺伝とをあわせたような内容であるが、やはり根拠は明確でない。

(21)『拾椎雑話』の原文は以下のとおり。「むかしは今の常高寺惣門の内より山門前道を横切西口へ出る。往来の道べなり。然るところ常高寺建立の時より清水町へつゝき道附替り、其節今道町と名付、今の正法寺の所は明地と成たりしを、仏

谷浦上ノ山観音を此所に移し、正法寺と号すと古老申伝ふ」。

(22) 大森宏「古代寺院の成立と展開」(『小浜市史』通史編上巻、一九九二年)。

(23) 中林隆之「東大寺領封戸の形成と皇后藤原光明子」(『国立歴史民俗博物館研究報告』九三、二〇〇二年)。

(24) 館野和己・櫛木謙周「第四章第一節二　若越の郷(里)」(『福井県史』通史編一、一九九三年)。

[図の出典]

図はいずれも筆者撮影。

[付記]

本稿は平成三十年度～令和三年度科学研究費助成事業　基盤研究(A)「三次元データに基づく人工知能による仏顔の様式研究」、令和五年度～令和九年度科学研究費助成事業　基盤研究(S)「ディープラーニングによる仏像の制作年代・地域推定システムの構築とその実装」による研究成果の一部である。

正法寺御本尊の調査にあたり、以下の方々にお世話になった。大橋正博、三宅清美(以上、正法寺)、杉本泰俊(中山寺)、河村健史(福井県立若狭歴史博物館)、下仲隆浩、川股寛亨、西島伸彦(以上、小浜市産業部文化観光課)。また、大橋正博、杉本泰俊両氏からは正法寺の歴史についてご教示を得た。記して感謝の意を表する。

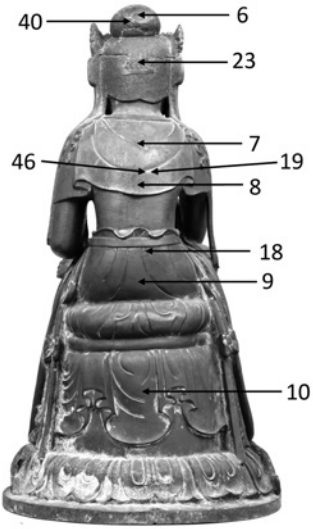
(人文学研究科教授)

巻末図表　正法寺御本尊の蛍光X線分析結果（計測ポイントと定量値）

No.	分析 部位	Au	Cu	Sn	Pb	As	Fe	Zn	Ag	Bi	Mn	Total	備考
1	額中央	0.00	96.52	2.03	0.16	0.74	0.15	0.00	0.00	0.36	0.04	100.00	嵌金？
2	左頬	0.00	95.01	2.97	0.15	1.43	0.08	0.00	0.00	0.36	0.00	100.00	
4	宝冠右前上部の宝珠飾り	0.00	96.71	0.60	0.23	1.36	0.17	0.30	0.00	0.56	0.07	100.00	
5	宝冠左前上部の宝珠飾り	0.00	97.06	1.00	0.10	1.28	0.25	0.00	0.00	0.22	0.08	100.00	
6	髻後方上部（鋳掛け部）	0.00	96.48	0.95	0.14	1.19	0.45	0.00	0.00	0.63	0.16	100.00	
7	背面上部中央(嵌金？)	0.00	95.21	2.55	0.30	1.21	0.19	0.00	0.00	0.49	0.05	99.99	
8	背面中央（天衣下部）	0.00	94.68	2.68	0.44	1.35	0.28	0.00	0.00	0.48	0.08	100.00	
9	臀部中央	0.00	95.47	2.80	0.20	1.18	0.22	0.00	0.00	0.12	0.00	99.99	
11	地髪左前方（金色の部分）	0.00	95.51	2.78	0.09	1.25	0.22	0.00	0.00	0.13	0.03	100.00	
13	左頬下寄り	0.00	95.47	2.76	0.10	1.33	0.08	0.00	0.00	0.25	0.00	100.00	
14	右頬	0.00	95.20	2.84	0.14	1.43	0.13	0.00	0.00	0.25	0.00	100.00	
15	左膝	0.00	95.62	2.65	0.24	1.12	0.17	0.00	0.00	0.11	0.10	100.01	
16	左脛下寄り	0.00	95.32	2.82	0.26	1.20	0.16	0.00	0.00	0.18	0.07	100.00	
17	右膝	0.00	95.13	2.48	0.36	1.35	0.11	0.00	0.00	0.56	0.00	100.00	
19	背面天衣下部やや右寄り	0.00	95.33	2.56	0.22	1.27	0.26	0.00	0.00	0.29	0.07	100.00	
21	右冠繒中ほどの遊離部	0.00	94.77	2.71	0.28	1.60	0.15	0.00	0.00	0.44	0.04	100.00	
23	後頭部(千切状の鋳掛け部)	0.00	97.69	0.86	0.12	0.44	0.18	0.00	0.00	0.65	0.05	100.00	
24	左足下の蓮花座正面下段の蓮弁	0.00	94.92	2.97	0.10	1.75	0.21	0.00	0.00	0.00	0.04	99.99	
25	台座地付き左方	0.00	89.61	6.00	0.47	1.79	0.57	0.00	0.00	1.50	0.06	99.99	
26	台座内右後方	0.00	94.06	3.67	0.20	1.05	0.17	0.00	0.00	0.58	0.26	100.00	
27	右耳朶後方	0.00	95.49	2.77	0.05	1.35	0.13	0.00	0.00	0.21	0.00	100.00	
28	左耳朶後方	0.00	95.20	2.82	0.00	1.41	0.45	0.00	0.00	0.00	0.12	100.00	
29	反花座左前の鋳掛け部の突起	0.00	94.94	1.55	0.19	1.88	0.42	0.00	0.00	0.70	0.32	100.00	
30	反花座左前の鋳掛け部(29の外側)	0.00	97.37	1.25	0.00	0.82	0.08	0.00	0.00	0.45	0.04	100.00	
34	右掌下部	0.00	94.18	3.22	0.26	1.53	0.43	0.00	0.00	0.32	0.06	100.00	
35	左冠繒の結び目基部	0.00	94.77	3.15	0.26	1.13	0.16	0.00	0.00	0.54	0.00	100.00	
37	宝冠左前上部の宝珠飾り	0.00	97.18	0.99	0.15	1.29	0.12	0.00	0.00	0.21	0.06	100.00	
38	右冠繒の結び目基部	0.00	94.09	3.95	0.05	1.59	0.15	0.00	0.00	0.14	0.04	100.00	
40	髻後方	0.00	93.92	3.07	0.23	0.97	0.39	0.32	0.00	0.98	0.13	100.00	
41	宝冠左方	0.00	97.03	1.02	0.11	1.20	0.19	0.00	0.00	0.37	0.08	100.01	
42	右頭飾上部	0.00	97.21	0.49	0.21	1.08	0.16	0.00	0.00	0.79	0.05	99.99	
43	口左方	0.00	97.93	1.26	0.14	0.56	0.12	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00	
44	左頬	0.00	98.53	0.90	0.07	0.42	0.08	0.00	0.00	0.00	0.00	100.01	嵌金？
45	左目左下	0.00	95.36	2.92	0.10	1.15	0.24	0.00	0.00	0.17	0.06	100.00	
47	左冠繒（左上膊外側）	0.00	94.25	2.69	0.49	1.46	0.60	0.00	0.00	0.45	0.07	100.00	
49	左頭飾円相上部（嵌金亡失ヶ所）	0.00	95.17	3.33	0.10	1.16	0.18	0.00	0.00	0.00	0.06	100.00	
	Average	0.00	95.51	2.39	0.19	1.23	0.23	0.02	0.00	0.37	0.06	100.00	

3	胸部左寄り	0.00	99.95	0.00	0.00	0.00	0.05	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00	嵌金
12	左頬	0.00	99.88	0.00	0.00	0.00	0.10	0.00	0.00	0.00	0.02	100.00	
20	胸部左寄り	0.00	99.96	0.00	0.00	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00	
22	左眉の上	0.00	99.87	0.00	0.00	0.00	0.10	0.00	0.00	0.00	0.03	100.00	
31	宝冠正面中央の宝珠	0.00	99.73	0.00	0.00	0.00	0.23	0.00	0.00	0.00	0.05	100.00	
32	冠帯右前方	0.00	99.82	0.00	0.00	0.00	0.18	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00	
33	冠帯台左前方	0.00	99.83	0.00	0.00	0.00	0.15	0.00	0.00	0.00	0.02	100.00	
36	左頭飾の前方	0.00	99.71	0.00	0.00	0.00	0.23	0.00	0.00	0.00	0.06	100.00	
39	右頭飾の前方	0.00	99.14	0.46	0.00	0.00	0.32	0.00	0.00	0.00	0.07	100.00	
50	冠帯左方	0.00	99.75	0.00	0.00	0.00	0.21	0.00	0.00	0.00	0.05	100.00	
51	冠帯左方	0.00	99.61	0.00	0.00	0.00	0.31	0.00	0.00	0.00	0.08	100.00	
52	冠帯左方	0.00	99.70	0.00	0.00	0.00	0.24	0.00	0.00	0.00	0.06	100.00	
	Average	0.00	99.75	0.04	0.00	0.00	0.18	0.00	0.00	0.00	0.04	100.00	

10	榻座後方	5.76	89.52	3.14	0.15	0.98	0.23	0.00	0.00	0.16	0.06	100.00	鍍金あり
18	背面腰帯の下	34.80	57.49	3.15	0.65	0.37	0.50	0.58	0.48	1.92	0.00	99.94	
46	背面中央（天衣下部）	6.27	88.59	2.74	0.15	1.18	0.59	0.00	0.00	0.38	0.11	100.00	
48	榻座にかかる裙の正面右方	5.49	89.96	2.88	0.39	0.87	0.21	0.00	0.00	0.20	0.00	100.01	

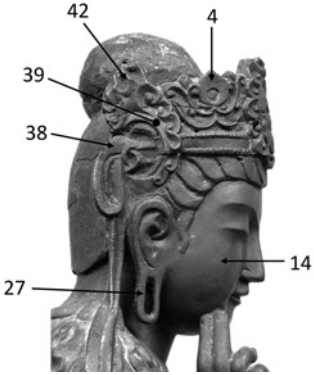

40
6
23
7
46
19
8
18
9
10

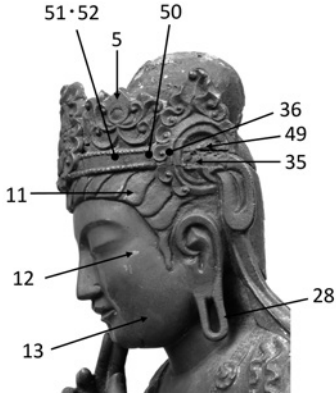
20
34
3
17
15
16
48
24

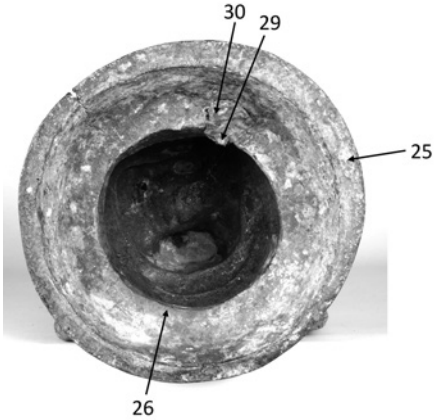
21

47

31
41
37
32
33
1
22
47
44
2
43


42
4
39
38
14
27


51・52
50
5
36
49
35
11
12
28
13


30
29
25
26

SUMMARY

A Study of the Pensive Bodhisattva Statue at Shōbōji Temple, Obama City

Yutaka FUJIOKA

The Pensive Bodhisattva Statue (said to be Nyoirin Kannon) at Shōbōji Temple, Obama City, is a rather large gilt bronze statue at 58.7 cm high and has been considered to be a copy of an older statue from the Kamakura period (1185-1333). This paper reexamines its status based on the results of recent research, including X-ray fluorescence analysis.

Almost the entire body of this statue is created using lost-wax casting. However, the upper part of the head is re-cast due to casting defects, and the back of the head is supplemented by a cast I-shaped clamp. The forehead and central part of the crown are fitted with separate parts cast in pure copper. The small lotus seat under the left foot, which was cast together with the main body, seems to have had an inner mold that was continuous with the main body, and the opening where the clay was removed is sealed by the casting. The statue thus uses advanced casting techniques. The bronze composition of the body averaged 95.5% Cu, 2.4% Sn, 0.2% Pb, 1.2% As, 0.2% Fe, and 0.4% Bi, and was found to be corresponding with ancient gilt bronze buddha statues in Japan.

The statue is fleshy and well-proportioned, and the garment folds are both realistic and decorative. The soft and fleshy face with prominent cheeks is similar to the Bodhisattva statue from Okadera Temple in Nara. The shape of the ears is similar to the Tenpyō period statues of Yakushiji Temple and the side attendant statues of Kōfukuji Temple's East Golden Hall. The crown and hair are similar to the statue of Bodhisattva in the Sakai City Museum, which is known to be a sandalwood statue from the Sui Dynasty. Considering these various aspects, this statue should be dated to the early Nara Period (710-794), and its place of production is thought to have been in Heijō (Nara).

According to legend, in 1184 (the first year of the Genryaku era) the head of the village ordered the statue to be lifted from the seafloor after it shone a golden

light from beneath the surface. However, there is a strong possibility that it was built in Heijō, and a new study is needed to determine its origin. Obama area has long prospered as the center of Wakasa Province and is known to have been connected with Tōdaiji Temple through the Shunie event. During the Nara Period, the territories of Tōdaiji Temple and Daianji Temple also existed in this area. Although it is not possible to confirm the origin of the statue in this study, there is still a possibility that this statue can pose as proof of the connection between Obama and Nara.